

水稲作のポイント

種籾の播種と育苗管理について

J A全農ちば
営農支援部

種子の配布も始まり水稲作付けがいよいよスタートします。

種子に関しては、低温貯蔵種子を利用する際は、休眠が深くなっている場合がありますので、浸種作業は注意して行いましょう。

近年、気象が極端化しています。「突発的な高温・低温」に注意をしましょう。

また、播種や植え付け時期の早限を越えると、冷害の危険性（特に植付の早い早生品種や低温に弱い品種）がありますので、適期播種・適期植え付けをしっかりと守り、良質な苗の移植を心がけましょう。

1. 稚苗移植の播種・植え付け時期及び出穂期の早限

各品種の耐冷性を考慮した播種・植付の早限は下記のとおりとなります。

品 種 名	地 域					
	安房・東京湾岸南部			その他の全域		
	播 種	植え付け	出穂期	播 種	植え付け	出穂期
ふさおとめ ふさこがね コシヒカリ 粒すけ	3月20日	4月15日	7月15日	3月25日	4月20日	7月20日

※稲作標準技術体系（千葉県・千葉県農林水産技術会議）より抜粋

※出穂期はコシヒカリ・粒すけの基準

2. 種子消毒について

種子伝染性の病害である「ばか苗病」・「いもち病」・「細菌性苗立枯（もみ枯細菌病、苗立枯細菌病、褐条病）」などの発生を防ぐために行います。

種子伝染性病害の多くは、種籾の周りや内部に侵入した病原菌が、育苗箱中に発生するため、事前の種子消毒による防除が重要です。

※種子消毒の動画を全農ちばホームページにて公開中です。

種子消毒剤及び使用方法

- ・ヘルシードTフロアブル 200倍 24時間浸漬
- ・テクリードCフロアブル 200倍 24時間浸漬

※薬剤浸漬の水温は10～15℃で実施しましょう。

極端な高温・低温は薬害、効果不足、発芽不良などが起こりやすくなります。

3. 浸種について

浸種は発芽を揃えるため、積算水温 100℃を目安に(水温 10℃で 10 日間)水に漬け、種子を十分に吸水させましょう。また、配布された種子で保証票に「低温貯蔵種子」の表記がある場合は浸種を長めにとりましょう(例：水温 10℃、12 日間、積算水温 120℃)。

種子消毒の効果を高めるために、浸種後 3 日目までは水の交換はせず、4 日目以降に水を交換しましょう。

種子消毒・浸種・催芽スケジュール例

一般種籾の場合	低温貯蔵種籾の場合	エコホープDJ使用の場合
種籾消毒 (24時間浸漬)	種籾消毒 (24時間浸漬)	種籾消毒 (24時間浸漬)
↓	↓	↓
陰干し (1日間)	陰干し (1日間)	必要なし
↓	↓	↓
※浸種 (3日間)	※浸種 (3日間)	※浸種 (3日間)
↓	↓	↓
水交換	水交換	水交換
↓	↓	↓
浸種 (3日間)	浸種 (3日間)	浸種 (3日間)
↓	↓	↓
水交換	水交換	水交換
↓	↓	↓
浸種 (2日間)	浸種 (3日間)	浸種 (2日間)
↓	↓	↓
水交換	水交換	水交換
↓	↓	↓
浸種 (2日間)	浸種 (2日間)	浸種 (2日間)
↓	↓	↓
催芽・は種	水交換	催芽・は種
	↓	
	浸種 (2日間)	
	↓	
	催芽・は種	

※浸種 4 日目以降は、毎日水交換を行っても良い。(浸種水温の上昇を防ぐ・空気供給のため)

※微生物資材 (エコホープDJ など) を使用する場合、種子消毒後に風乾 (陰干し) しない。

4. 培土消毒・播種

培土消毒は育苗中に発生する苗立枯病 (カビ) や、細菌病を予防するために行います。

使用薬剤及び使用方法 (フタバロンA粉剤を利用する場合)

- (1) 播種前の床土への灌水はタップリと行いましょう。
- (2) 薬剤と育苗用土の混和は、使用量をきちんと守り、播種 7 日前～播種直前に実施しましょう。(培土 20 リットルに対して「フタバロンA粉剤」100 g を均一に混和)
- (3) 薬剤は「**覆土**」のみに行いましょう。
- (4) 播種直後の覆土への灌水は行いません。

また、床土の灌水と、播種後の覆土が少ないと「根上がり」しやすくなるので注意しましょう。

育苗箱に発生する苗立枯病の種類と病徴及び発生条件

農作業安全 ハウス建設の事故、ハシゴからの転落注意！ **食の安全安心** 農薬使用後は必ず記録簿へ記帳しましょう。

※ 本資料の無断使用・複写・転載を禁じます JA全農ちば

病原菌	病徴	発生条件	薬剤名
リゾープス菌	箱の表面全体に白～灰色のカビが広がる。	出芽時の高温(35℃以上)・多湿	ナエファインフロアブル ダコレート水和剤 ダコニール 1000
フザリウム菌	籾の周りに白～ピンク色のカビが生じる。	播種後の低温及び乾燥と過湿の繰り返し	ナエファインフロアブル ダコレート水和剤 タチガレエースM液剤
トリコデルマ菌	地際部に白カビが生じ、その後青緑色カビに変わる。	出芽時の高温(30℃前後)	ダコレート水和剤
ピシウム菌	坪枯症状をおこす。萎凋し下葉から褐変枯死する。	緑化期以降の低温	ナエファインフロアブル タチガレエースM液剤

※農薬を使用する際は登録内容を再確認しましょう。



リゾープス菌 (白色)



フザリウム菌 (ピンク色)



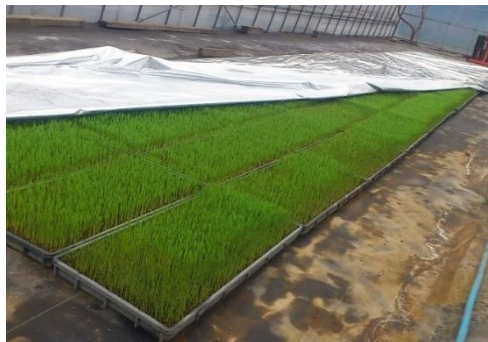
トリコデルマ菌 (緑色)

5. 育苗時の温度管理

水稻の平置き育苗は播種後～出芽まで昼間 20～30℃、夜間 10～20℃の温度の確保が必要です。しかし、3月下旬の播種は育苗時に低温になる期間が多く、出芽の遅れや病気が発生するリスクが高くなります。健苗育成のために、被覆資材で保温し温度管理をしっかりと行いましょう。

「太陽シート」は、被覆内の日中の高温防止と夜間の保温を同時に行い発芽適温を保つ資材で、緑化期までのハウスの換気作業を軽減することができます。ただし、低温期の保温効果が低いため、ハウス内が 10℃以下になることが予想される場合は、太陽シートの上、または下に手持ちの被覆資材で2重掛けを行い、保温に努めます。

また、播種後、太陽シートを被覆する際に、ハウス内および地温を高めておく事で、保温効果を発揮させることができます。



太陽シート利用の様子